

2019年(平成31年)度～2022年(令和4年)度

学校教育総合プランに沿った重点とする取組と評価

【 逗子市立逗子小学校 】

教育環境の充実		4年間を見据えた取組内容		地域との協働推進			
2019年(平成31年)度		2020年(令和2年)度		2021年(令和3年)度		2022年(令和4年)度	
期首入力	学校の 実態と課 題	①学校安全については、火災・地震(津波)・不審者対応の避難訓練を学校として行っており、さらに文化教育ゾーンとしての訓練に参加している。 ②教科指導におけるICTの活用については、教室のプロジェクターや配備している実物投影機の数が増え、十分に活用できている。 ③地域との協働については、学校支援地域本部事業やPTA活動における協働、地域行事の逗子小での開催等に取組んでいる。 ④学校評価については、学校評議員や学校関係者評価委員だけでなく、日頃から保護者・地域の方々の意見に学校として耳を傾けている。	・手すりの修繕など「学校の生活環境を整えていくのは本来、市が行うべき仕事であるのに・・・。」という考えの保護者の方々への説明責任を学校としてきちんと果たしていく必要がある。 ・これまで学校支援地域本部事業を支えてきてくださった方々の後継者の育成が急務である。 ・老朽化した校舎にはいくつも修繕が必要となるところがあるが、なかなか予算的に厳しいものがある。 ・自然災害の激甚化により、従来行ってきた学校の対応を検討する必要がある。	・「コロナ禍」により、例年実施していた学校行事や学年行事などが中止せざるを得なくなり、今年度実施した代替行事等を踏まえて次年度以降の年間行事等を考えていく必要がある。 ・「GIGAスクール」の推進により、ICT環境は整備されたが、それを十分に活用する教員サイドの技量や学習内容、指導方法等について学校全体で取り組んでいかなければならない。			
	年度目 標	・学校の構造上、防災・防犯面では脆弱な所があるので、避難訓練や日常的な防災・防災教育で児童の意識を高めていく。 ・学校支援地域本部事業での様々な取り組みやPTA活動、ふれあいスクール・学童との情報交換等を通じて、学校に求められていることは何かを見つけ、学校としてできる範囲で前向きに保護者や地域との連携を進めていく。	・「コロナウイルス感染症予防」のために臨時休校となっており、今後、これまでのように教室等で多くの児童が一斉授業が行えるかどうか分からない状況の中で、ICTの活用も含め、どのように児童に学習を保障していくかを検討し、実施していく。	・前年度の取り組みを参考に、年間を見通した学校行事や学習指導計画を立てるが、状況が変化しても臨機応変に対応できるように教職員間でコンセンサスを取りながら取り組みを進めていく。 ・ICTを活用した児童のコミュニケーション能力の育成を目指し、校内研究を進めていく。			
	取組計 画	・児童や教職員の学校での教育活動を支えるため、またより充実したものとするためのリソースとして保護者や地域を捉え、連携をさらに進めていく。	・児童の家庭のICT環境を調査するとともにメールやホームページを活用した在宅児童への学習課題の提示を進めていく ・学校再開に向けての学習環境の整備(修理・修繕)を進めていく ・学校再開後の学校としての感染予防への取り組みを家庭や地域と連携しながら進めていく	・感染予防については従来通り取り組みながら、その時々の状況の中で児童のモチベーションを失わないように、できる範囲で行事や学習活動を行っていく。 ・保護者と教職員、保護者同士が昨年以上につながって行けるような取り組みを進める。 ・ICTの活用に関する教員側の研修を講師を招いて進めていく。			
	実践した 内容	・避難訓練の実施(火災避難訓練・地震避難訓練・津波避難訓練・不審者侵入避難訓練) ・津波避難訓練は文化教育ゾーンの訓練に参加 ・従来の学校支援地域本部事業のほかに、今年度はPTAと協力して募金とボランティアを募り、各教室のベランダの手すりのさび止め塗料の塗布を実施した。 ・学童の指導者とふれあいスクールの指導者と毎月情報交換を実施し、学校以外での児童の状況把握に努めた。	・年間授業時数を見通した授業実施計画の見直しを行った。 ・日課表を変更し、手洗いの時間を確保し、休み時間も「密」を避けるようにした。 ・オープンスペースを有効に使用して教室を広く使い、換気も心掛けた。 ・保護者に協力してもらい、校内の消毒活動を行った。 ・「密」を避けるための時差登校や「検温チェック」等を行った。 ・臨時休校期間中や分散登校期間中に、ホームページやメールを使って積極的に情報発信や課題の配信を行った。 ・児童の家庭の「ICT環境」を調査し、学校からの配信等に対応できない家庭には「iPad」を貸し出した。				
期末入力	達成度 評価	A	A				
	評価の 根拠	・従来の学校支援地域本部事業に加え、PTAとの協力により手すりの修繕を行い、子どもたちの生活環境が改善された。また、当日は多くのボランティアの保護者の方々に参加していただき、募金もたくさん集まった。 ・学童の指導者、ふれあいスクールの指導者と定期的な情報交換をすることで、児童の友達関係や学校では見られない児童の様子などについて把握することができた。また、不審者対応訓練などを学童・ふれあいスクールの指導員の方々に見学していただき、学校との連携をとることができた。	・多くの保護者の方々が「消毒ボランティア」「低学年の給食ボランティア」に入ってください、校内の感染予防に役立った。 ・日課表の変更や時差登校などが児童に定着している。 ・「GIGAスクール」の推進によって、ICT環境が整い、教員も積極的に活用している。 ・「コロナ禍」の中、調理実習や合唱・合奏など「感染の危険性がある取り組み等」を除いてモジュールの時間を毎日とることにより、当初心配していた授業内容の軽減等について解消されつつある。				
	学校の 実態を踏 まえた課 題	・手すりの修繕など「学校の生活環境を整えていくのは本来、市が行うべき仕事であるのに・・・。」という考えの保護者の方々への説明責任を学校としてきちんと果たしていく必要がある。 ・これまで学校支援地域本部事業を支えてきてくださった方々の後継者の育成が急務である。 ・老朽化した校舎にはいくつも修繕が必要となるところがあるが、なかなか予算的に厳しいものがある。 ・自然災害の激甚化により、従来行ってきた学校の対応を検討する必要がある。	・「コロナ禍」により、例年実施していた学校行事や学年行事などが中止せざるを得なくなり、今年度実施した代替行事等を踏まえて次年度以降の年間行事等を考えていく必要がある。 ・「GIGAスクール」の推進により、ICT環境は整備されたが、それを十分に活用する教員サイドの技量や学習内容、指導方法等について学校全体で取り組んでいかなければならない。				

2019年(平成31年)度～2022年(令和4年)度

学校教育総合プランに沿った重点とする取組と評価

【逗子市立逗子小学校】

柱Ⅰ	学習指導の充実		4年間を見据えた取組内容		今日的課題への取組	
	2019年(平成31年)度		2020年(令和2年)度		2021年(令和3年)度	
期首入力	学校の実態と課題	①授業改善については、新しい学習指導要領の完全実施に向けて授業研究を進めている。また、教員の自己チェックリストも活用している。 ②児童体力づくりの面では、授業教諭による食育の授業や義理教諭による保健の授業等を行っている。また、児童のSNSの使用について校外機関に依頼して授業を行っている。 ③体験活動では、街探検や学区を中心とした校外学習、高学年の林間学校や修学旅行などを行ない、実感の伴った体験活動を実施している。 ④今日的課題については、様々な内容が学校教育の中に取り込まれているが、何をどのように学ばせるかを考えていく必要がある。	・新しい学習指導要領に基づいた学習の改善については、これからも努力が必要で、実践を積み重ねながら進めていく必要があり、児童の実態も学年や発達段階に応じて異なってくるので日々、意識しながら取り組んでいく必要がある。 ・ICT機器を活用した授業への取り組みは、Wi-Fi環境の整備が急務であり、特別支援学級を含めて27クラスある本校にとって40台のタブレット端末では活用したいときに活用できずに順番待ちという実態がある。	・ICT環境が整ってきたので、いかにそれらを活用して「主体的対話的な深い学び」を指導することができるか検討していき、実践を積み込んでいく必要がある。 ・児童への「情報モラル」の指導はもちろんのこと、教職員にも改めて「情報モラル」等について再確認していく必要がある。		
	年度目標	・授業研究や研修を通じて授業改善を進めていく。 ・日常の学校生活はもちろんのこと道徳の授業への取り組みや異年齢集団による縦割り集団活動等を通じて児童の社会性を育成していく。 ・学習規律を身につけさせ、落ち着いた学習に取り組めるようにする。	・臨時休校により、学校からの発信をもとにしたICTを活用した学習の取り組みを行ったが、現在、学校でできるICTを活用した取り組みについてさらに検討し、進めていく。 ・新しい学習指導要領に基づいた学習の実践および評価について、著しく学習期間が短縮された中でどのように実践していくか検討を進める	・ICT環境が整ってきた中、それらを活用した授業への取り組みについて、学年内での取り組みの差異が無いよう計画的な活用と教材や活用技術の共有を進めていく。 ・定期的に研修会を開いて、ICT機器の活用について苦手意識を持っている教員の底上げを図っていく。		
	取組計画	・今、学校で取組まなければならない課題がすべて「今日的課題」だと考えている。教育の本質は不変だが、児童や教職員を取り巻く環境はたえず変化しているの、それらを踏まえて学校として臨機応変に「今日的課題」に取り組んでいく。	・限られた学習時間を有効に使用して学習を進めていくためには各学年、学校全体としてカリキュラムマネージメントを考えていく ・先を見通した現実的な学習指導計画を立案し、それに基づいて進めていく	・校内研修会において、取り組み事例の共有化を進める。 ・学年内で交換授業を積極的に進めることにより、学習活動に差異が生じないようにする。 ・「逗子市立学校 教育情報化推進ガイドライン」をもとに教職員間で情報モラルについて再確認する。		
期末入力	実践した内容	・新しい学習指導要領の全面実施を踏まえた校内授業研究の実践と研究会での発表を行った。 ・新しい学習指導要領への移行期間中の取り組みについて学年ごとに把握し、漏れのないよう取り組んだ。 ・縦割り活動や児童会行事での異年齢集団による活動を実施した。 ・1年生の始まりに「スタートカリキュラム」の実践を行った。	・各学年、各教科ごとに臨時休校後の授業時数等を考え、学習計画・学習内容の精査を行い、年間指導計画を組みなおした。 ・ICT機器の活用について、これまでであったiPadを使用し、他の学校に先駆けて「google for education」等に取り組んだり、ZoomやClassroomを使用して家庭にいる児童との双方向の発信等に取り組んだ。 ・「GIGAスクール」の推進により、校内のICT環境が整備されてきたので、できるところから取り組んでいる。			
	達成度評価	A	A			
	評価の根拠	・湘南三浦教育事務所管内の教育課程研究発表会や県の小学校体育教育研究会において校内研究の取り組みの発表を行い、一定の評価を得ることができた。 ・新しい学習指導要領への移行に向けてチェックリストを作成し、各学年で取り組み状況をチェックした。 ・年度途中に導入されたタブレット型端末の使用が進み、児童が興味を持って授業に臨む姿が見られた。 ・児童の学習場面に、外部からの講師等呼び、体験的な学習などを積極的にに行った。	・校内のWifi環境が整い、ICT機器の活用エリアが広がった。 ・いち早く児童個人のID・パスワードを配付し、ICT機器を使用して学習に取り組めるよう進めてきた。 ・「GIGAスクール」の取り組みにおいて、教職員の研修を早くから行い、ICT環境の整備や端末機器の操作等における課題について検討をし、取り組んだ。			
学校の実態を踏まえた課題	・新しい学習指導要領に基づいた学習の改善については、これからも努力が必要で、実践を積み重ねながら進めていく必要があり、児童の実態も学年や発達段階に応じて異なってくるので日々、意識しながら取り組んでいく必要がある。 ・ICT機器を活用した授業への取り組みは、Wi-Fi環境の整備が急務であり、特別支援学級を含めて27クラスある本校にとって40台のタブレット端末では活用したいときに活用できずに順番待ちという実態がある。	・ICT環境が整ってきたので、いかにそれらを活用して「主体的対話的な深い学び」を指導することができるか検討していき、実践を積み込んでいく必要がある。 ・児童への「情報モラル」の指導はもちろんのこと、教職員にも改めて「情報モラル」等について再確認していく必要がある。				

2019年(平成31年)度～2022年(令和4年)度

学校教育総合プランに沿った重点とする取組と評価

【 逗子市立逗子小学校 】

柱Ⅱ		支援の充実		4年間を見据えた取組内容		支援環境の充実		
		2019年(平成31年)度	2020年(令和2年)度	2021年(令和3年)度	2022年(令和4年)度			
期首 入力	学校の 実態と課 題	①支援環境の充実については、教育相談コーディネーターを中心に外部機関とも連携して取り組んでいる。 ②居場所づくり・絆づくりについては、自己チェックリスト等を活用し学級経営を振り返り、巡回支援チームからもアドバイスをしていただき参考にしていく。 ③問題行動・不登校対策については、未然防止のために教育相談コーディネーターや児童指導支援部との情報交換、ふれあいスクール・学童との情報交換などを密に行なっている。 ④幼保小・小中の連携については、幼保小間の連携は園児・児童の間で交流があるが、小中の間では中学の教員が授業を実施している以外はあまり無い。	・年々、支援ニーズを持つ児童が増えてきており、支援の方法等について巡回支援チーム等からアドバイスをいただいで、学年・担任・教育相談コーディネーター・管理職等で打ち合わせをしているが内容が多岐にわたり、また、時間もかかりたいへんである。 ・児童への支援にとどまらず、家庭や保護者への支援が必要なケースも多く、外部機関とも更に連携していかねば対応できない。 ・学校から、あるいは担任から保護者への説明責任がきちんと果たせていないと、いろいろな面で関係がこじれてしまうことがある。 ・学年として、担任として支援ニーズを持つ児童等へどのように支援をして行くかを主体的に考える必要がある。	・現在、支援教室や相談室で対応してくれているコロナ対策の「補習等指導員」は、次年度勤務時間の大幅な削減が予想される。そうすると支援が必要な児童への対応が手薄になる。 ・次年度は、支援教室・相談室・保健室対応の児童の支援のために、専科等で研修時間になっている教員が対応できるよう学校として取り組んでいきたい。				
	年度目 標	・学級の課題を学年で共有し、学年の課題を学校で共有することによって「支援環境の充実」「安心できる居場所づくり、絆づくり」「問題行動や不登校対策」等について共通理解、共通の取組みを行なう。 ・ケースによっては、外部機関の力を借りて支援にあたる。 ・スタートカリキュラムについての取組みを進める。	・在宅期間が長引くにしたがって、支援ニーズが児童への支援にとどまらず、家庭や保護者への支援が必要なケースも見られ、外部機関とも更に連携して対応をしていく。 ・学校から、あるいは担任から保護者へ学校・学年・学級の取組みについて、説明責任をきちんと果たす。	・特別支援学級に在籍児童が大幅に増え、普通学級に在籍している支援ニーズを持った児童を含めると、これまで以上にどの支援等が必要になっているので、教職員が協力し、多方面からのアプローチを試みるなどさまざまな支援を進めていく。 ・医療ケアが必要な児童のための看護士が充実してきたが、勤務の調整を図り、看護・支援について共通理解を進めていく。				
	取組計 画	・教育相談コーディネーターを中心として、児童指導支援部との情報交換、巡回支援チームとの振り返りなどで教職員間の情報共有を図り、児童理解を進め、それぞれのニーズにあった支援を行なっていく。	・教育相談コーディネーターを中心として、児童指導支援部との情報交換、巡回支援チームとの振り返りなどで教職員間の情報共有を図り、児童理解を進め、それぞれのニーズにあった支援を行なっていく。 ・教育研究相談センター、子育て支援課、児童相談所など外部機関とも連携を取って支援を進めていく。	・教育相談コーディネーターを中心として、教職員間の情報共有を図り、巡回教育指導員等の外部機関と連携を取りながら、児童理解を進め、それぞれのニーズにあった支援を行なっていく。 ・学習支援員、看護士など校内の支援リソースを有効に活用していく。				
期末 入力	実践した 内容	・巡回支援チームが求校した折には、教育相談コーディネーターを中心に管理職との振り返り、その日に見ていただいた学年との振り返りを時間を設けて行い、授業改善、学級経営の改善に取り組んだ。 ・教育研究相談センター、児童相談所、子育て支援課、放課後デイ等の外部機関とも連携を取り、支援ニーズを持つ児童、家庭に対して支援を心掛けた。 ・スタートカリキュラムについては、年度当初一年生で取り組んだ。	・教育相談コーディネーターを中心として、情報交換や巡回支援チームとの振り返りなどで教職員間の情報共有を図って児童理解を進めた。 ・学童クラブやふれあいスクールの指導者とも定期的な情報交換を行い、学校以外での児童の言動を把握し、児童指導の一助とした。 ・児童が抱えるそれぞれの支援ニーズにあった支援を行なうよう、学習支援員・補習等指導員も改めて指導にあたった。 ・教育研究相談センター、子育て支援課、児童相談所など外部機関と定期的な会議(打ち合わせ)を行い、連携を図って支援を進めてきた。					
	達成度 評価	A	A					
	評価の 根拠	・支援ニーズを持つ児童への支援が計画的、組織的に行われ、不登校気味の児童も学校へ通うようになった。 ・教育相談コーディネーターを中心として、関係する教員や外部機関との連携した取組みが行われている。 ・教員ではなかなか対応が難しいケースについてはスクールカウンセラー等に直接保護者のカウンセリング等を行っていただいた。	・臨時休校明けや分散登校後に様々な面で「不安定」だった児童が、支援により生活リズム等が定着したり、教室で授業を受けられるようになってきた。 ・不登校だった児童が徐々に登校できるようになったり、フリースクールに自ら通うようになってきている。 ・不登校の一部の児童とは「オンライン」で担任と話をしたり、学習に取り組んだりすることができるようになってきた。					
学校の 実態を踏 まえた課 題	・年々、支援ニーズを持つ児童が増えてきており、支援の方法等について巡回支援チーム等からアドバイスをいただいで、学年・担任・教育相談コーディネーター・管理職等で打ち合わせをしているが内容が多岐にわたり、また、時間もかかりたいへんである。 ・児童への支援にとどまらず、家庭や保護者への支援が必要なケースも多く、外部機関とも更に連携していかねば対応できない。 ・学校から、あるいは担任から保護者への説明責任がきちんと果たせていないと、いろいろな面で関係がこじれてしまうことがある。 ・学年として、担任として支援ニーズを持つ児童等へどのように支援をして行くかを主体的に考える必要がある。	・現在、支援教室や相談室で対応してくれているコロナ対策の「補習等指導員」は、次年度勤務時間の大幅な削減が予想される。そうすると支援が必要な児童への対応が手薄になる。 ・次年度は、支援教室・相談室・保健室対応の児童の支援のために、専科等で研修時間になっている教員が対応できるよう学校として取り組んでいきたい。						

2019年(平成31年)度～2022年(令和4年)度

学校教育総合プランに沿った重点とする取組と評価

【逗子市立逗子小学校】

<b>柱Ⅲ</b>	<b>学校組織の充実</b>	<b>4年間を見据えた取組内容</b>	<b>研究・研修の充実</b>
-----------	----------------	---------------------	-----------------

<b>2019年(平成31年)度</b>	<b>2020年(令和2年)度</b>	<b>2021年(令和3年)度</b>	<b>2022年(令和4年)度</b>
----------------------	---------------------	---------------------	---------------------

<b>学校の 実態と課 題</b>	<p>①学校・学年・学級経営の充実については、学年職員間で意思の疎通を図り、また、学校経営については様々な面で組織的に対応できるように取組んでいる。</p> <p>②授業改善だけでなく、児童理解等においても研究・研修を行なっている。</p> <p>③信頼に基づいた指導については、学級通信や懇談会、面談だけでなく、日頃から教員としての説明責任を果たすよう心がけている。</p> <p>④働き方改革については、学級事務や成績・評価のための時間を確保し、超過勤務にならないよう学校全体で取組んでいる。</p>	<p>・これまで総括教諭として校務分掌の仕事を中心にしてきたメンバーや、ベテラン事務職が今後2、3年のうちに退職や異動を迎えることになり、逗子小として取り組んできたこれまでの様々なことや残すべき文化や伝統などを継承し、尚且つ発展させていくことが大きな課題であると考え。</p>	<p>・次年度は「退職者」や「本校での経験年数による異動」「市内の他校の状況」等から考えて大規模な異動が予想される。新たな教職員を迎え、今後も様々なことに臨機応変に対応していかなければならない中、改めて教職員間の風通しをよくし、協力体制を構築していかなければならないと考える。</p>
---------------------------	--	--	--

<b>期 首 入 力</b>	<p>・自己チェックリスト等を活用し、学級運営等について振り返る。また学校経営については保護者・地域のニーズを踏まえて学校の枠の中で取組んでいく。</p> <p>・外部講師による研修や研究授業に対する指導助言等だけでなく、参加した研修内容の還元等を行なうことで教育活動を充実させる。</p> <p>・校務支援システム有効活用を図る。</p>	<p>・教職員の感染予防等のために在宅勤務や特別休暇など、本来この時期に確立していなければならない組織としての仕事の遂行等に遅れが出ているので、学校再開に向けて、また学校再開後、効率よく本来の仕事や分掌を進めていく</p> <p>・この2、3年で総括教諭として校務分掌を中心的に担ってきた複数の教員が退職を迎えるので、仕事内容やグループの運営等について計画的に引継ぎ</p>	<p>・多くのベテラン、中堅教員の異動に伴い、新しく赴任してきた教職員が一日も早く職場に慣れ、また、若手の教職員が持てる力を発揮できるような職場づくりを進めていく。</p> <p>・「コロナ禍」により、これまで当たり前のように毎年実施してきたことが、その都度その都度状況を踏まえて対応することが求められているので教職員間の共通理解・意思の疎通を進め、臨機応変に物事に対応していく。</p>
----------------------------	--	---	--

<b>取組計 画</b>	<p>・若い世代の教員が増えてきて、ベテラン教員が退職していく中、継承していくべき学校文化や共有すべき学習教材や手法、児童理解のあり方等を学校全体で考え、継承し、より良い教育活動に取組んでいく。</p>	<p>・今年度の学校行事や様々な取組みについて、総括教諭を中心とした校務分掌グループ、あるいは学年代表を中心とした学年の教員で再検討を進めるとともに、今後に向けての行事の精選を進めていく</p> <p>・総括教諭としての仕事やそのノウハウを引継ぎができるようにミドルリーダーの育成をこれまで以上に図る</p>	<p>・今年度の学校行事や様々な取組みについて、校務分掌グループ、あるいは学年の教員で再検討を進めるとともに、今後に向けて「コロナ禍」での行事のスタイルの確立を検討していく。</p> <p>・異動してきた教員もこれまでの経験をもとに、今年度の学校行事や様々な取組み等について積極的に関わっていくようにする。</p>
------------------	---	--	---

<b>実践した 内容</b>	<p>・新しい学習指導要領の全面実施に向けて、年間の学校行事等の見直しを図り、授業時数の確保に取り組んだ。</p> <p>・働き方改革の取り組みとして、これまでであった様々な行事等を見直し、成績をつける時間や研究に取り組む時間、授業の準備をする時間の確保などに取り組んだ。</p> <p>・中堅、ベテランの教員を中心に、学年体制を組み、学年経営・学級経営について常に話し合いながら行うよう取り組んできた。</p>	<p>・年度途中で療養休暇・休職に入った教員の代わりに、学年だけでなく学校全体としてフォローにあたった。</p> <p>・コロナ禍によって学校・学年行事等の変更を余儀なくされる中で、児童のことを考えて臨機応変に教職員は対応をした。</p> <p>・コロナ禍にある現状の中で、次年度以降の学校行事等の精選や代替行事等を学年、それぞれの分掌でリーダーを中心として検討を進めている。</p>	
--------------------	--	--	--

<b>達成度 評価</b>	<b>B</b>	<b>B</b>	
-------------------	----------	----------	--

<b>期 末 入 力</b>	<p>・若手教員、中堅教員、ベテラン教員それぞれが力を発揮して取り組んできているが、それぞれが抱えるクラスや学年の課題を解決していくためにいつも遅くまで仕事をしたり、休日出勤をしていることが多い。</p> <p>・学年としてどのような方針で学年の児童を育てていこうと共通理解を図っていると思うが、なかなか保護者にはそのことが伝わらず、児童指導や様々な面で対応に苦慮している。</p> <p>・県費負担教職員、市費職員、臨時的任用教職員、非常勤教職員などおり、また、逗子小以外にも学校を掛け持ちしている教員など、様々な立ち番の教職員がいる中で、細かい意思の疎通を図るのが難しいこともある。</p>	<p>・各学年、各分掌とも、学年代表や総括教員を中心に、コロナ禍の日々の対応や学校としての様々な取組み、保護者への発信等について協力して取り組んだ。</p> <p>・代替行事などについて、児童の希望や発想をもとにして、児童が達成感や成就感を感じられるように、できる範囲の中で工夫して実施した。</p> <p>・今年度は若手、中堅、ベテラン教員がそれぞれの考えや経験を踏まえて協力し様々な事象を乗り切ってきた。</p>	
----------------------------	---	--	--

<b>学校の 実態を踏 まえた課 題</b>	<p>・これまで総括教諭として校務分掌の仕事を中心にしてきたメンバーや、ベテラン事務職が今後2、3年のうちに退職や異動を迎えることになり、逗子小として取り組んできたこれまでの様々なことや残すべき文化や伝統などを継承し、尚且つ発展させていくことが大きな課題であると考え。</p>	<p>・次年度は「退職者」や「本校での経験年数による異動」「市内の他校の状況」等から考えて大規模な異動が予想される。新たな教職員を迎え、今後も様々なことに臨機応変に対応していかなければならない中、改めて教職員間の風通しをよくし、協力体制を構築していかなければならないと考える。</p>	
------------------------------------	--	--	--